

オリーブの会通信

مجموعة الزيتون

2022年10月20日第23号 (通巻29号)

オリーブの会

大阪府豊能郡能勢町平通101-453

tel/fax:072-737-9454

mail: olivenokai_zeytun@yahoo.co.jp

facebook:oribunokai



アリーナ・アスワドの呼びかけで結集する人々

ガザのイスラム聖戦への攻撃以降、パレスチナの闘いは、ガザから西岸に移っている。イスラエルは、自治政府が西岸の治安を維持していないと批判し、西岸に対して航空機を使った攻撃も辞さないとし、西岸への占領軍の増強を行っている。

ジェニン、ナブルスは、西岸での武装抵抗の拠点となりつつある。武装グループ「アリーナ・アルアスワド (ライオンの巣)」が登場した。これは、既存のパレスチナ党派の枠組みを越えたものとしてある。また、この枠組みには、48年領内の若者も含まれているとして、イスラエルのその親族に制裁を加えるということを行っている。連日のように、武装抵抗が行われている。これまで、イスラエルは、西岸や、エルサレムでの武装攻撃を、個別的な個人によるものとみていたが、アリーナ・アスワドの登場により、個別的な抵抗ではなく、組織的な抵抗に発展しつつあることを示している。

これは、西岸の闘いが、民衆的な抵抗から、武装抵抗へと発展している。西岸での武装解除をその役割をとする自治政府の治安部隊は、その正当性を完全に失っている。

オスロ体制の突破が始まりつつある。

もう一方で、アルジェリアの仲介によるパレスチナの民族的統一のための対話が行われた。そして、アルジェリア宣言として、すべての党派が署名を行った。しかし、この宣言で、これまでの対立を克服できるのであろうか。すでに、この合意がアルジェリアの都合によって開催されたものであり、パレスチナの内部的な要求でおこなわれているものではないこと。また、パレスチナ民族評議会の選挙、大統領選挙、総選挙がうたわれているが、これまでそれらが合意の下で履行されてきたことはないために、常に文言だけに終わって来た、その実行を担保するものがなにも示されていない。しかも、これまで、パレスチナの仲介を行い、パレスチナへの影響力をもつエジプトがかかわっていないなど、実効性は非常に弱いと思われる。根本的には、オスロ合意の幻想にしがみついている自治政府ファタハとオスロ合意を否定し、抵抗運動を基本に置こうとする、ハマスや他のパレスチナ諸派が一致するはずがない。

その証拠に、ファタハのアップス大統領は、カザフスタンでのSIC首脳会議に参加し、あくまでも、二国家解決の方向であることをしめた。米国がイスラエル寄りであることが変わらないために、米国の影響力が少なくなるところへと仲介者をもとめようとする。その必然的な結果がプーチンに支援をもとめることになっている。

しかし、そこにはイスラエルへの影響力を行使できる存在がなく、和平の前提としての和平交渉すらできない状況にあり、また、頼みの綱のアラブ諸国は、雪崩を打って、イスラエルとの正常化に走り、対イランでの軍事同盟を米国、イスラエルともに作るどころまですた。そこには、パレスチナ問題が彼ら自身の問題となることはない。反対にパレスチナがイスラエルに支配されたままでのパレスチナ国家を目指すしかなくなっている。

現在の状況では、イスラエル、米国が2国家解決に積極的ではなく、イスラエルはパレスチナの併合と、イスラエルのもとでの主権のないパレスチナにとどめていこ

うとしている。バイデンが中東を訪問した際に、明確にしたように、今は2国家解決を進めるときではないとしている。米国にとっては、イスラエルとアラブ諸国の正常化で、対イランでの軍事同盟を形成することが中東和平の実現の道になっており、そこには、パレスチナ問題が入る隙間はなくなっている。

西岸での闘いが拡大しているのは、大国の力関係に依存してパレスチナ問題を解決するのではなく、自らの抵抗闘争を通して、解放の実現を図るほかないことを示している。



英雄的な「シュアファット検問所」作戦が新たな蜂起を呼び起こし、占領軍は存亡の窮地に立たされる

投稿:2022年10月13日 | 10:34(PFLPのホームページより)

アルヤン・アルヤン

パレスチナの火炎球は、2000年のアルアクサ・インティファーダ以来、前例のない形でジェニン、ナブルス、トゥバスからヨルダン川西岸の他の地域に移動しつつあり、占領に対する武装抵抗は、占領との対決の主要な見出しとなっており、シオニスト敵は、その治安と軍事指導者の認識により、それに終止符を打つことができずにめまいのような状態で生きているのである。

先週の日曜日、シュアファット・キャンプ(エルサレム)のパレスチナ人青年が、シュアファット軍事検問所内で至近距離で行った、イスラエル人女性兵士の死亡ともう一人の兵士の負傷という英雄的作戦は、戦術による事前計画に基づいているパレスチナ青年の大胆さの程度を明らかにするようになった。それは、オスロ合意

の不吉で屈辱的な調印の後に生まれたパレスチナの抵抗青年によって開始され、それ以上に危険なのは、兵士と武器で重武装したバリアの内側から撤退し、大衆のジャングルの中に姿を消すことができたことであった。

その英雄的作戦の実施以来、シュアファット・キャンプは占領軍による包囲を受け、作戦の実行者を求めて周辺を襲撃しているが、市民的不服従の宣言を先頭にした闘争、キャンプ住民の石などによる激しい抵抗に遭っている。。

西岸は抵抗力を取り戻し、治安調整の惨めな交渉も無視し、民衆と武装の次元での抵抗を敵に教えている。ナブルス、ジェニン、トゥルカルム、カルキリーヤの各旅団の戦闘員が、占領軍と衝突し、彼らに損失を与えない日はほとんどない。シュアファット検問所の作戦の後、ナブルスで作戦が行われ、イスラエル兵が死亡した。ジェニン県の「アルジャラマ検問所」、ナブルス県の「ハバ

ラ検問所」、ヘブロン県の「ベイトウマル検問所」など、占領軍の検問所はほぼ毎日銃弾と爆発物の標的になっている。

敵は、ゲリラは特定の組織に属さず、個人で突発的に活動を行う集団であり、「一匹狼」に近いと説明し、この蓄積された激流を止める展望が目の前にないことを認め、治安・情報機関は、彼らが組織的枠組みの中で工夫した戦闘方法のライオンたちであるという事実を認識できていなかったという。アルハジャル（石）やアルアクサの蜂起の経験を生かし、ジェニン、ナブルス、トゥバス旅団が武装党派の背後に立ち、「アリー・アルアサド」（ライオンの巣）グループがその抵抗の中ですべての党派や大隊と一体化している組織状態であることにイスラエル兵士の死によって気がつきました。

事態は、占領軍の検問所への攻撃という奇襲的な要素に止まらず、ナブルス地区の「ライオンの巣」グループは、占領軍を前にして反抗の試練に達し、占領軍の保護下にある入植者が「ユスフの墓」に到着すると、来年11月に予定されている選挙で、敵の首相の選挙バランスを破壊するために占領軍が大きな人的損失を被ることを日中に公然と発表したのである。

私たちは今、次のような特徴をもつ新しい蜂起の兆候に直面している。

1、武力と民衆の抵抗という2つの次元を兼ね備えている。すべてのコマンド作戦の後、わが人民の大衆は、石や焼夷弾で占領軍に立ち向かっている。

2- 武力抵抗のための真の大衆培養器が存在し、それが武力抵抗を勢いよく継続させることを可能にしている。

3- ヨルダン川西岸の広場は、占領に直面して互いに結束しており、その最も顕著な例は、「ライオンの巣」グループの声明に基づき、シュアファット陣営と連帯してヨルダン川西岸の各都市・陣営に浸透したストライキと、その他の都市・陣営が占領との衝突の過程に入り込んでいることであろう。包囲された陣営への圧力を緩和すること。それは、「アナタ周辺」やエルサレムの他の地域の対立への参加、西岸陣営の対立への参加、その間のヘブロン県アルアルブ陣営からの殉教者の台頭などに現れていた。

4- 人民的および武装的な次元での抵抗に参加する世代、

すなわちオスロ後の世代は、和解と交渉の条件に反発し、オスロとその派生物がユダヤ化と入植の隠れ蓑を形成し、アルアクサ・インティファダの頓挫以来、自治政府が占領のための治安工作員となったことを具体的に理解したのである。

パレスチナ西岸は、占領とその国民に対する凶悪な犯罪、オスロ方式とそのパレスチナ人の大義に対する清算的役割によって粉々になり、抵抗組織を通じて、軍事的次元での抵抗と民衆の抵抗以外に占領を破る方法はないことを表明したのである。

シオニストイスラエルは、1948 地域の人々の抵抗とガザ地区とヨルダン川西岸での抵抗の統合の結果として、存在的苦境にある。

疑問は残る。インティファダのこの状態は、その抵抗のための枠組みなしで残るのだろうか？ 戦闘的な活動のプログラムがないままなのだろうか。政治的なプログラムもないままなのだろうか。

これらの質問に対する答えは、地上の抵抗諸派とその旅団に依存する。また、指導部とプログラムの枠組みは、上から確立されるのではなく、占領と対立する土地に存在する勢力から現場で形成されるという客観的評価においてである。



アリー・アスワドのシンボルマーク



投稿:2022年10月06日 | 10:24 (PFLPのホームページより)

毎年9月になると、パレスチナ人の記憶に多くの大惨事、虐殺、パレスチナ人の大義に大きな影響を与えた政治的事件がよみがえるが、なかでも原則宣言条約、いわゆるオスロ合意は、パレスチナ民族闘争の本質と方向性を変えた合意である。それは、空白から生まれたのではなく、パレスチナ内部、アラブ、国際レベルで、政治的、知的、法的、財政的、民主的な観点から、それを頓挫させかねない障害を取り除き、従属させ、無力化し、破壊することによって準備されたものであった。

原則の宣言(オスロ合意)には、交渉の目標が明示されており、それは、5年間に設定された移行期間の終了後、安全保障理事会決議242と338の実施につながるものでなければならず、その間にパレスチナ自治政府は合意の条項で約束したこと、特にテロとの戦いやパレスチナ解放機構の残りの党派のオスロ合意への義務、その政治・治安上の意味合いに関連するものを実施することになる。エジプトの都市タバで署名され、1995年9月28日にワシントンで正式署名されたオスロ合意1とそれに続くオスロ合意2の監査役。合意の枠組みや文章は、イスラエルの安全保障と入植権に関してきっちり策定されており、パレスチナ自治区に、パレスチナ人の国家、政治、法律、歴史、人権の本質を損ねるイスラエルの安全保障利益によって規定された役割を義務づけることが指摘されています。

合意から29年、イスラエル占領の日々の現場行動；それは、オスロ原則宣言1とオスロ2合意が次のことを達成したことを示している。

第一：政治的、法的、合法的に

1- イスラエルは、国家の独立につながるパレスチナの政治的権利を頓挫させ、政治的、法的な認識を取った。

2- パレスチナ解放機構を、パレスチナ民族解放運動の枠組みから、分離・散在する人口集中地のための文民行政(国権)へと変質させたこと。

3- 紛争の潮流を、民族的権利を得るための闘いから、ユダヤ人国家の適格性をめぐる闘いに変え、パレスチナ人の民族的政治的自決権に関するいかなる考えも廃絶すること。

4- オスロ1号と2号は、ユダヤとアラブの二つの国家の樹立を定めた国連決議181と、1948年に避難したパレスチナ人に帰還権と補償を与えた194を削除した。あるいは帰還権と補償。この二つの決議に言及しなかったため、イスラエルの代表は、アメリカの支援を得て、パレスチナ人に対するシオニストとイギリスの犯罪に対する唯一の国際法的証人としてナクバ犯罪の後に成立したUNRWAを継続する正当性を打ち出すに至ったのである。

5- オスロ合意は、イスラエルの立場に決定的に偏ることを宣言しているアメリカの援助のもとで、パレスチナ問題を国際法的解決の枠組みから二国間解決の枠組みへと追いやった。

6- オスロ合意第1号と第2号は、この地域の紛争の本質を、民族解放闘争から、内外の異なる複数の方向性を持ち、宗派と宗教を中心とした新しい同盟を描く宗教的性質の紛争に変えた。

7- オスロ合意1、2は、キャンプ・デイヴィッド合意を正当化し、アブラハム合意の入口と道しるべとなるもので、ヨルダン政権にワディ・アラバ合意の調印を促し、オスロ合意1、2によって生じる権利に基づいて国際国境を引くことを望んだものであった。

8- オスロ合意1、2は、パレスチナの人々を暴露し、攻撃的なイスラエルの弾圧と殺人マシンに直面して彼らを

放置し、現場での暗殺、逮捕、襲撃、取り壊し、土地没収のイスラエルの占領に法的正当性を与えた。パレスチナのテロとの戦いの正当性の下では、パレスチナ自治政府は入植者とイスラエル軍を標的としたテロ行為に直面し占領と協力しなければならないことが明記されていた。この協定は、パレスチナ国民に対して日々行われている植民地占領の犯罪的な政策からパレスチナ国民を守ることに触れていない。

パレスチナの達成は、国家よりも少なく、自治よりも広い政治形態の達成であったと考える人もいるだろう。決議242と338に基づく解決の枠組みを定めたオスロ合意1、2の包括的なビジョンの中では、この二つの決議は、PLOを最終解決の当事者として法的に適格ではない。67年6月の戦争や73年10月の戦争の当事者ではないが、アラブ政権との包括的合意の枠内で解決の入り口になる可能性があるのである。

この協定によって、パレスチナ自治政府とその治安部隊は、パレスチナ国民と日常的に対立するようになり、殺害、破壊、移住、毎日の逮捕という機械に直面している国民を保護するという国家的役割を失うことになったのである。

第二：経済的・財政的な面

パリ協定と呼ばれる経済協定は、パレスチナ自治政府とパレスチナ経済をイスラエル経済と結びつけ、イスラエルに資金の監視と指示の権利を与えた。一方、PAの資金はヨーロッパ、アラブ、アメリカの援助に限られ、そのほとんどは治安部隊の建設とパレスチナ自治政府の職員の給与と一部のインフラプロジェクトの資金に向けられた。

関税や税金の資金については、イスラエルの管理下であり、政治状況や当局やその機関のイスラエル占領への協力の度合いによって、あるいは強要や服従のためにより多く通過したり保留されたりし、これらのルート外の資金はすべてパレスチナのテロ支援を目的とした違法資金と見なされる。

経済協定は、イスラエルにパレスチナの商品と資金を監視する権利を与え、支配する交差点を通過することを条件とし、そのセキュリティ要件に沿って商品进行分类する権利を与え、さらに、財政移転、インフラプロジェ

クト、または一部の研究センターへの援助など、金融フロー、これらのほとんどは、オスロ1および2の結果の受け入れを促進し、それによってこれらの資金は有益なクラス形成に貢献しました；それはオスロで合意した原則と合意を受け入れるためにパレスチナ集団意識を変更しようとする動きに貢献しようとして働きました。これらのグループは、パレスチナ社会にとって一過性の圧力勢力となり、その政治勢力は29年以上にもわたって優勢な政策を継続し、その主な関心事となっているのである。

第三：知識主義と民主主義

パレスチナ内部の対話は、パレスチナ解放闘争の局面についてであった。アラブ政権の戦略の中でパレスチナ解決の基礎を築くために、パレスチナとアラブの右派がとった入り口は、パレスチナ右派指導部に暫定プログラムを承認させ、撤退の解釈があいまいな国連決議242を受け入れるよう促した。パレスチナの国家的独立を達成するパワーバランスの中で、暫定という概念とその達成の相関関係についてのパレスチナの合意の欠如。それは、パレスチナとアラブの政治的に最悪の時期にオスロ合意の調印に至ったのであった。当時のパワーバランスは、イスラエルとその同盟国に有利な形で決着していた。

パレスチナの民族派党派の対話という言葉が優勢であったが、オスロ合意はその承認を考慮していない。民族派の党派間の民主的対話の必要性。むしろ、非民主的な方法で署名され、押し付けられた。パレスチナの知的・政治的基盤は、オスロ原則宣言に沿って変更された。

オスロ合意1、2から29年後、合意書に署名したパレスチナ人政党の承認を得て；イスラエル人は合意書から自分たちに属するものを奪い、オスロ1、2で規定した公約を反故にした。

29年後、イスラエル占領軍も、この協定を支持するパレスチナ人党派も、パレスチナ人民にこの協定を押し付けることはできなかった。むしろ、協定は民衆と政治的な力を失った。

29年後、イスラエルがオスロ協定をアラブ社会に浸透するための橋渡しとして、またアラブの公的制度の正当化のために、イスラエルとの広報と正常化を発表するためイスラエルとの広報と正常化を発表するために利用したことを誰もが知ることになった。それらのいくつかは、さらに協定に署名した。その正常化を正当化し、アラブ

の門を通して世紀の取引として知られているものを課すために政治的目標のために宗教的なスローガンが使用された誤解を招くようなバナーの下に。

世紀の取引の条件を監査すると、それがオスロ合意1および2を基礎として構築され、オスロ合意に含まれる概念と原則が拡大・詳細化され、条件が分離されて理解やキャンプ・ダビッド、ワディ・アラバ、アブラハム協定と結びついたことが分かる。2022年3月にモロッコ、UAE、バーレーン、エジプト、米国、イスラエルが参加したベエルシェバ会議の成果を発展させるためにイスラエルが採用した投資は、世紀の取引の条件を実行するための投資である。

繁栄と栄華の嘘

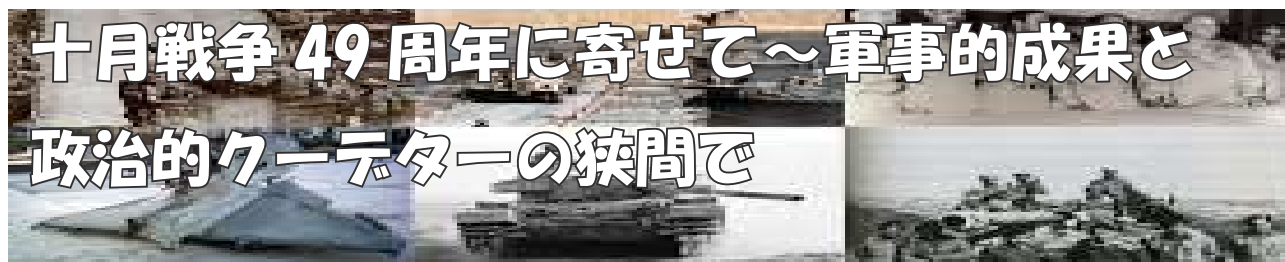
キャンプ・デービッド合意、オスロ合意、ワディ・アラバ合意、そして最後にアブラハム合意の調印は、繁栄、繁栄、平和のスローガンの推進を伴っていたが、29年後、これらの合意が貧困の増大、負債の増加、民主的生活の不在の原因となり、その基準は占領国イスラエルとの同一性と互換性の度合いになっていることが分かる。

29年の間に、パレスチナの人々は、分裂と不平等、全般的なフラストレーションの要因となったオスロ合意から離れ、民族と歴史の権利をめぐる闘争から宗教、宗派、

教義の次元を持つ紛争へと方向と本質を変える入口となることを目指して、彼らの選択が占領に抵抗することであることを証明したのである。:

民族的・統一的基盤に基づくパレスチナの国家プロジェクトの再構築は、紛争の民族的本質を回復させる決定的な要因である。イスラエルが帝国主義資本主義体制の攻撃性と残虐性の最も顕著な表現であることが明らかになった後、イスラエルといくつかのアラブ政権を一緒にするものは、彼らによるこれらのスローガンの使用は誤解を招くことであり、最大の証拠は、任意の運動、運動や会議を受け入れるための基準を決定するために、自由、民主主義と平等に敵対している本質的なものです。攻撃的なイスラエルに対する彼の立場に基づいて、そして、攻撃的で実質的なイスラエルを拒否し、それと正常化するという彼らの選択を複数回にわたって発表した地域の人々の選択の現実に基づいていない。

世界が変化し、世界秩序の再配置がイスラエルの利害とは一致しない形で行われていることは明らかであり、パレスチナ勢力はその情勢をよく読み、新しい世界秩序の再生に投資していかなければならない。



2022年10月06日 | 10:23(PFLPのホームページより)

十月戦争とその結果について、エジプトとアラブの国家レベルで、その勃発から49年後に取り上げるには、私の主要な見出しについて一旦立ち止まる必要がある。アブデル・ナセルがロシアの専門家と連携して作成した戦争の基本計画／アブデル・ナセルが去った後、アメリカ人の「ヘンリー・キッシンジャー」は、彼の指導の下、シオニスト団体と締結した協定を通じてサダト大統領は計画の実施を回避／アブデル・ナセルのアプローチからのサダトの完全な背教、ナセル派のリーダーの逮捕、アメリカやサウジの独裁への絶対服従／ハーフェズ・アサド大統領と合意した軍事計画に対するクーデター、編集

ではなく和解を動かす文脈での戦争、外相の手になる単なる人形への変身、などなど。

まず アブデル・ナセルと6月敗戦に対応する戦争計画

1968年6月26日のエジプト・シリア首脳会談で、アラブ連合共和国の政治的・軍事的目標、すなわち侵略の影響を除去することを定義することが合意された。こうして、エジプト軍の戦略は、シナイの占領地の解放と、エジプト・パレスチナの国境線への到着とその安全確保、次に、パレスチナ人の権利回復のための政治的成功の利用、ゴラン高原の解放後のシリア軍のティベリアス湖への到着となり、アブデル・ナセルが定めた期間は3年であった。

この日以来、エジプト軍はエジプト軍総司令部の指令に基づき、1967年に占領された土地の解放計画を練り始めた。修正された花崗岩の計画 このように、スエズ運河を横断し、バーレブ・ラインを破壊する完全な計画は、ガマル・アブデル・ナセル大統領がソ連の軍事専門家と連携して立案し、サダトはこの計画を後の10月戦争で実行したが、細部でそれを失敗し、勝利を政治的敗北に変えてしまったということであった。

(バーレブ・ライン (英語: Bar-Lev Line) あるいはバーレブ線とは、1960年代末にスエズ運河沿いに構築されたイスラエルの対エジプト拠点群・およびその周辺施設の総称である。建設当時のイスラエル軍参謀総長ハイム・バーレブ (英語版) (ヘブライ語: חיים בר-לב , 英語: Haim Bar-Lev, 1924年-1994年) の名を冠してバーレブ・ラインと称する。)

北は地中海から南はスエズ湾にまで至る、南北170キロメートル、東西30キロメートルの長大な拠点群である。

ナセルは1970年9月の生前に、スエズ運河の横断と5つの橋の頭部の架設に始まり、シナイの支配海峡、占領下パレスチナとの国際境界線に至る3段階の解放戦争を含む「花崗岩計画」を承認していた。

ナセルはまた、第二軍と第三軍の間の重要な接合部におけるシオニストの敵の反撃を想定した(プラン200)を承認した。1973年10月(そして、サード・エルディン・エルシャズリー参謀総長の、その隙間を埋めて敵軍を早期に撃破する計画を拒否した)。

この計画を実行するために、エジプト軍は1969年に(イスラエル)との力の均衡に達することができました。ガマル・アブデル・ナセルが軍に最大の戦略的支援を提供したとき、防空の利益のためにソ連との1970年1月の取引に代表される、世界最大かつ最先端のミサイルの壁、イスラエルの航空-イスラエルの唯一の優れた兵器に挑戦することに成功した。

ナセルは、政治的、軍事的な準備の完了を踏まえて、1969年11月11日を開戦の日としており、ロジャースのプロジェクトを戦術的に受け入れることを利用して、スエズ運河のミサイル壁の建設を完了させた後、この日、戦争を開始した。ガマル・アブデル・ナセルはモハメド・ファウジー将軍に、1970年11月7日に停戦期限が切れると同時に解放の戦いを開始する準備をするよう命令し、サミ・シャラフ(ガマル・アブデル・ナセルの情報担当秘書、前大統領府大臣)は、1970年8月-8月にガマル・アブデル・ナセルは「グラナイト1」「グラナイト2」および「カイロ2000」横断計画にサインしたことを確認している。後者は、占領地解放計画の実行を開始するための緑色の最終的な光を意味し、彼はミサイルの壁を完成させ、解放戦争を開始する決定は時間の

問題だったスエズ運河の西岸の端にそれを移動することによって、解放戦争の準備を完了した後、イスラエル空軍からエジプトの空を確保し、交差の瞬間へのカウントダウンが開始されました。

第二段階: サダトは戦争のために設定された日付を遵守することを拒否した

ナセルが去った後、サダト大統領は、軍総司令官であるムハンマド・ファウジ中将の再三の要求にもかかわらず、決められた開戦日を守ることを先延ばしにした。同時に、彼は演説や会合で「1971年は断行の年である」と宣言した。決戦の年... というスローガンを掲げて。平和であれ戦争であれ、いつまでも待つてはいられないと、71年7月23日のアラブ社会主義連合全国会議での演説で、1971年は中東危機を決定的にする年であると宣言したのである。

サダトが先延ばしにして、新しい日付での戦争開始の「戦闘命令」に署名しないことが、1971年5月13日にムハンマド・ファウジ将軍が「ナセル派全員」とともに辞表を提出するきっかけとなり、サダトが彼らを全員逮捕するきっかけとなった、いわゆる「権力の中枢」事件と1971年5月15日のクーデターは、その後彼の潜行性と真意のすべてをベールとして脱がし、その結果イスラエル訪問を行うことになったのであった。

1971年が過ぎても、サダトは占領地に関して和平も戦争も何も解決せず、インドとパキスタンの戦争による「霧」があったことを理由に、解決に関してサダトが消極的で先延ばしにしている。米国は、サダト・アミンに、カイロにいる米国大使代理を通じて、イスラエル国家を承認し、これと直接交渉を行う用意があることをイスラエルに伝えるよう命じた。

第3段階アメリカとサウジの命令にサダトが従うこと

アメリカは、エジプトとイスラエルの和解を支援するために、サダト政権に4つの条件を提示し、これらの条件は、1972年7月の第1週にワシントンから帰国してカイロを訪問したサウジのスルタン・ビン・アブドゥル・アジズ国防相によって運ばれ、これらの条件は彼女であった。

- 1- エジプトからソ連の軍事顧問と専門家を追放すること。
- 2- 経済の枝で働く社会主義国からのすべての技術者の除去。
- 3- エジプトの対外貿易を根本的に変えること。
- 4- エジプトの社会主義に関連するすべてのもの(主に公共部門)の清算。これらの条件の実行が進めば、サウジアラビアはエジプトへの経済支援を増やすと約束

されていたのである。

アメリカの条件とサウジの要求に応えるという意味では、第一の条件は、スルタン王子とのアメリカの条件の到着後すぐに、リチャード・ニクソン米大統領からイスラエルへのけん制を約束してもらい(イーガル・アロンも8月30日にイスラエルがエジプトからのソ連兵撤退を利用しようとしないうちに、サウジアラビアのファイサル・ビン・アブドゥルアジーズ国王

サウジの役割は、アブデル・ナセルが率いる7月23日革命の成果と遺産を清算し、ソ連との関係を終わらせるために、アメリカの役割と統合されました。サダトがナセル派を排除してから1ヵ月もしないうちに、サウジアラビアのファイサル・ビン・アブドゥルアジーズ国王

がカイロのサダトを訪問し、この訪問で両者は次の重要事項に合意した。

- 1- サダトは、エジプトの土地からソビエト軍を排除する道を歩み続けること。
- 2- サダトがイスラエルとの戦争に突入することを決定した場合、両者の間で完全な協調が必要であること。
- 3- サウジアラビアや他の国に亡命している「ムスリム同胞団」の指導者をエジプトに帰還させること。

サダトは、アメリカ・サウジのエジプトにおけるソ連のプレゼンスを排除する要求を固守し、1972年7月にエジプトにおけるソ連の専門家、コンサルタント、技術者のサービスを打ち切る有名な決定を出し、ムス



投稿：2022年9月20日 | 13:18 (PFLPのホームページより)

エルサレム人は、長年にわたり、シオニストのエスカレートする対策に直面してきました。それは、制限や移転の試み、さらには財政的・経済的なインセンティブや誘惑を通じて、本質的に彼らをエルサレムから根こそぎ追い出すことを目的としています。その根底には、教育過程と教育課程をめぐる戦いがある。

新学期が始まると、エルサレムの占領以来、教育の「家族化」を確立し、教育カリキュラムを歪めるというシオニストの敵の試みが再び前面に出てくる。新しいパレスチナ世代の家畜化の入り口となり、彼らの心に「イスラエル」を占領ではなく、存在する自然の存在として植え付け、敗北文化の導入、これらの世代のパレスチナとのつながり、抵抗と不動の価値を強化するすべてのものの解除によって、心を歪めようとするのである。

これらのシオニストの政策は新しいものではないが、止まることなく、むしろ占領によって設定された意図的な計画に従ってエスカレートしており、いくつかのレベルを含んでいる。一方では、エルサレムの占領自治体の支配下にある学校を強化・拡大し、パレスチナ人学校やUNRWA学校を包囲し、他方では、私立学校にインセンティブと誘惑を与えているのである。もちろん、占領軍の政策は、この歪んだ危険な政策に服従することを拒否する

人々を脅し、威嚇し、迫害することを通じて、その犯罪思想から逸脱することはなかった。

エルサレムの人々は、操作されたシオニスト・カリキュラムを押し付けようとする試みを拒否して、エルサレムの学校での包括的ストライキを通じて、意識を高め、カリキュラムを操作しようとする必死の試みに立ち向かうという文脈で、新たな質的ステップを踏み出したのである。その重要性にもかかわらず、エルサレムの教育過程を「家族化」の危険から守るために、公式、派閥、民衆の行動が統合された統一的な国家政策の中で蓄積される必要がある。

危機の壁紙

1967年のエルサレム占領以来、敵当局は、教育制度を標的とした「家族化」政策の枠組みの中で、自らの存在感を強めるのに役立つ新しい政治的アイデンティティを生み出し、エルサレムをアラブのアイデンティティから遠ざけることを目的に、「聖書の約束の地ドクトリン」を押し付けてその代替目標を達成させてきた。

占領軍は、ヨルダン教育法を廃止し、エルサレムのヨルダン教育事務所を閉鎖し、公立学校を支配下に置き、シオニストのカリキュラムを押し付けるという決定を下したが、この試みはエルサレム市民の大きな拒絶に遭い、

エルサレム市民は子供を学校に送ることを拒否し、ヨルダンカリキュラムを継続して教える私学に子供を通わせることとなった。

もちろん、占領軍はこの試みにとどまることはなかった。むしろ、ヨルダンのカリキュラムの本の中のフレーズ、格言、詩、段落、ページなどを徐々に誤魔化し、歪め、消し去ることによって、代替方式を見つけ、ヨルダンのカリキュラムを占領軍のカリキュラムに合併したものの、占領軍が自らの思想と文化を通そうとした歪んだカリキュラムを提示しようと努めたのである。しかし、この試みも却下され、1973年に成立したヨルダンのカリキュラム改訂版では、ヘブライ語の教育や「イスラエル国家」の教科化を押し付けるとともに、パレスチナという名称を削除し、占領下のパレスチナの都市や村にヘブライ語の名称を使用するようになった。

オスロ協定が締結され、パレスチナ自治政府が発足し、パレスチナ教育省が設立されると、同省はエルサレムでは養老院学校のみ教育責任を負い、東エルサレムの養護学校、パレスチナ私立学校、UNRWA 学校ではヨルダン式のカリキュラムが引き続き教えられたが、占領側はスローガンも削除することも規定した。パレスチナ自治政府は書籍を拒否し、ヘブライ語と自治体の歴史を教え続け、エルサレム人の生徒は、パレスチナ国民政府がオスロ合意後に最初のパレスチナカリキュラムの作成を完了するまで、ヨルダンのカリキュラムを勉強し続けた。

エルサレムの学校（占領地自治体の学校を含む）におけるパレスチナのカリキュラム本の適用は、2000 / 2001 年度の1年生から徐々に始まり、2005 / 2004 年度の12年生の中等教育（tawjihi）においてその実施が完了するまでになった。

この新しいパレスチナのカリキュラムが教えられて以来、占領当局は、クネセットの「教育・文化・スポーツ委員会」を数回招集して新しいパレスチナのカリキュラムについて議論するなど、いくつかの委員会やセンターを通じてこのカリキュラムを制限・追従し、見直しの対象とし続けている。イスラエルは、パレスチナ人カリキュラムの書籍を検閲し、占領への「扇動」やパレスチナ人の政治的アイデンティティを示すと考えられるものをすべて削除し、修正した歪曲版で書籍を印刷し直し、その系列の学校に配布するという仕事を任されたのである。

修正（歪曲）されたカリキュラムのフォーマットで削除された内容には、殉教や帰還の権利に関する詩に加え、パレスチナ国旗や岩のドームの写真、愛国心、シオニスト運動の出現、歴代のパレスチナ人民蜂起に関する情報などが含まれている。

占領下のエルサレムで、パレスチナの新しいカリキュラムを狙い撃ちする作戦とその試みは、2009年の過激派元イスラエル高等教育大臣（ギデオン・セイガー）、彼の後の過激派元教育大臣（ナフタリ・ベネット）の時代からエスカレートし、彼らの戦略は、イスラエルのカリキュラム全体をパレスチナのカリキュラムに置き換えることにあり、一般路線が作られた。これらの戦略によって、占領自治体の統制下で学校を建設し、幼稚園から高校までイスラエルのカリキュラムを教えることにより、パレスチナ・カリキュラムによる教育は次第に侵蝕されつつあります。

2009年、占領軍はパレスチナ占領地内のパレスチナ人生徒のカリキュラムからアル・ナクバという言葉も削除し、2011年からは占領軍はそのすべての市民・治安機関を活用して、エルサレム市におけるパレスチナ人カリキュラムの家族化の計画を策定している。

近年、そして2018年から2023年の政府5カ年計画の中で、占領政府はエルサレムのアラブ系住民をイスラエルの社会と経済に統合するために、全予算20億シェケルから、(875) 万シェケルを教育プロセスの促進に割り当てている。

包囲されたパレスチナの学校

占領当局は、建物、教育環境、設備、コンピュータ室、技術、科学など... の面でも、給与、行政機関や教育機関に与えられる奨励金、正課・課外活動や学校活動の実施に投入される資金の面でも、当局の学校を反発する学校に変え、競争力を持たせようとしたのである。

占領自治体は、当局に所属する学校からエルサレムの旧市街を空にした。占領自治体は、保安検査や屈辱的な検査を通じて旧市街の学生を標的にし、威嚇・脅迫したため、学生は旧市街の学校への入学を控えるようになったからだ。

占領軍は、エルサレムの教育過程を統制し、私立学校

オリーブの会通信 第23号(通巻29号)

の業務に干渉することを目的とした手続き、慣行、政策をエスカレートさせ、そのほとんどが占領自治体とその知人の輪から条件付きの金銭を受け取っている状態である。

占領自治体はまた、エルサレムの学校は、パレスチナのカリキュラムと並行してイスラエルのカリキュラムを教える授業を開くべきだと規定し、それらへの資金援助を停止し、学校免許を撤回すると脅すとともに、占領当局の教育部門に、これらの学校の監督や授業での学生の準備などのフォローを指示する教育視察者を派遣する権利を与えている。

占領自治体と政府は、エルサレムのアラブ系住民に対応する委員会(17の委員会のうち12は、現・元警備隊員が管理・監督している)など、さまざまな手段を使ってパレスチナの学校を包囲している。これらの委員会は、標的を強化するための統合的な戦略の作成に取り組んでいる。UNRWAは、それらの学校で採用されているカリキュラムが、占領という実体、その正当性、存在に対して扇動し、当然ながら抵抗を意味するテロの実践を奨励するという口実と口実のもと、閉鎖と空洞化を図ろうとしているのである。

占領当局がとった措置は、教育カリキュラムの内容に直接関係するものである。

パレスチナ自治政府のロゴを削除し、エルサレム自治体のロゴに置き換える。

パレスチナのカリキュラムからパレスチナの国旗を削除する。

カリキュラムの中で「イスラエル国」という名称を強く強調する。

規定の本のページに「イスラエル」国旗を登場させること。

エルサレム市を「占領国家」の永遠の首都として強調すること。

エルサレムの位置は、彼らが「ユダ砂漠」と呼ぶ場所の中にあると定義している。

パレスチナの地図を削除し、パレスチナの地図全体が「イスラエル」であることを証明する。

「イスラエル占領」という言葉を削除する。

用語の構造を証明する。

教育カリキュラムの内容内で、他の国家を示すものを削除すること。

占領自治体に所属するすべての学校において、「イスラ

エル」の独立文書を表示すること。

宗教的概念、文学作品、パレスチナ人の詩的な詩をカリキュラムから排除すること。

家族プロセスの真の対決に立ちはだかる最も重要な障害物：

占領当局が提供する奨励金と、その支配下にある学校の継続的な発展の前に競争がないこと、それとは対照的に、パレスチナの学校には大きな発展や近代化が存在しないこと。

エルサレムの学校でシオニストのカリキュラムを教えるために、エルサレム人の中で「請負業者」あるいは「推進者」として知られている人たちが、占領軍の計画を通すためにパレスチナ人の政党が加担していること。これらの人々は、国家のことよりも自分たちの利益、奨励、欲を優先させていること。

エルサレム人の不動産の強化、教育施設の開発、必要なインセンティブの提供、そして一方で、彼らの計画を通過しようとするパレスチナ占領エージェントに直面することを目的と対立のための統一され統合された国家政策の不在。

占領政策を拒否する当局の公的立場にもかかわらず、この立場は、カリキュラムを歪め、エルサレムの何万人ものパレスチナ人学生にシオニストの考えを通すための手続きに立ち向かうことを目的とした実際の行動を伴っていない。

対決のための政策提言：

パレスチナ自治政府は、占領地エルサレムの教育部門を支援するために、学校の近代化と修復、教師への給与アップのためのインセンティブの提供、そして本物のパレスチナのカリキュラムを教える新しい付属学校の設立に取り組むことを目的とした、明確な政策をとっている。

占領自治体の計画に応じず、占領に加担するすべてのパレスチナ人関係者を包囲し訴追することによって、占領地エルサレムの学校の運営に圧力をかけ、「家族化」計画に立ち向かうために、国民運動派とイスラム行動派がとった国家政策。

「家族化」計画に立ち向かい拒否し、歪曲されたパレスチナのカリキュラムとイスラエルのカリキュラムを教える学校を追求し続けることによって、占領地エルサレムにおける民衆委員会と父母連合協議会の役割を活性化し発展させる方針。

学校長や教育活動の不動心、支持、支援を強化し、様々な手段でシオニスト教育カリキュラムとの対決を強化

し、学校での通過を拒否すること。

パレスチナ人の意識を標的とし、敗北の文化を伝えるシオニストのカリキュラムの危険性とその目標についての認識を高めるキャンペーンを立ち上げること。

シオニスト・カリキュラムへの関与拒否の影響を受けた

パレスチナ日誌

7月15日

- ・バイデンの訪問に合わせて、占領当局は、92の入植地住宅の建設を承認。
- ・イスラエルは、カラシプラットホームに対する軍事的エスカレーションを恐れている。
- ・ラピドとヘルツォグは、バイデンとハマスに拘束されている捕虜の問題について話し合った。
- ・ハマス：エルサレム宣言は、占領の合法性を与えるものではない。
- ・バイデンがアベツレヘムに到着し、アッパーと会談する。
- ・バイデンは、占領下エルサレムの病院に1億ドルを支援した。
- ・パレスチナ人たちは、バイデンのベツレヘム訪問を非難した。
- ・ナブルスのベイタとベイトダジャンでの衝突で、22人が負傷。
- ・カフル・カッダムの弾圧で、占領軍の銃弾で、5人が負傷した。
- ・アプマーゼン：我々はバイデンと多くの焦眉の課題で米国政府と共同することに合意した。
- ・民主戦線：エルサレム宣言は、地域戦争に火をつけるための招待状である。
- ・サウジ国王とバイデンは二国関係の強化について話し合った。

7月16日

- ・ナブルスの南の検問所で、2人の青年を逮捕した。
- ・ガザから周辺の入植地に2つのロケットが発射された。
- ・占領軍機がガザとヌセイラトを爆撃
- ・サウジ：二国解決が履行される前のイスラエルとの正常化はない。
- ・ハマス：占領軍のガザへの爆撃は、我が人民に対する全面的な侵略の継続である。
- ・イラク首相：ジェッダ首脳会議は、イスラエルとの正常化の問題について論議しないだろう。
- ・バイデン：我々は、中東をロシア、中国、イランに渡さない
- ・ヨルダン国王：独立したパレスチナ国家の創設抜きに安全も安定もあり得ない。
- ・バハレーン国王は、二国家に基づいたパレスチナ国家の創設の必要性を強調した。
- ・安全保障と開発のためのジェッダ首脳会議がサウジとアラブ諸国、米国の参加ではじまった。
- ・マサフェールヤッタで、占領軍の労働者の追跡で6人が負傷

7月17日

- ・バイデンはサウジを出発。
- ・占領軍は、ベイトファジャルの2人の青年を逮捕した。
- ・ガンツは、ロケット発射への対応として、1500の労働許可を凍結した。
- ・ツバスの占領軍との衝突で、逮捕者と負傷者。
- ・マサフェールヤッタで、占領軍の市民への攻撃の結果、窒息者
- ・占領軍は、エルサレムの3人の市民を逮捕した、
- ・アルアクサの中で、入植者が、礼拝とダンスをした。

7月18日

- ・占領軍は、西岸で14人のパレスチナ人を逮捕した。
- ・イスラエル軍は、レバノン国境で、ドローンを落とすと発表した。
- ・サルフィットの西で、入植者たちが60本のオリーブの木を根こそぎに。
- ・占領当局は、ヘブロン以南で、6軒の家の工事の停止と井戸の撤去を通知した。

学校を支援するための財政基金を立ち上げること。

国際的な圧力を活性化させ、欧州連合と国連の代表を巻き込んで、占領軍にエルサレムの教育現実への干渉を止めるよう圧力をかけること。

- ・占領当局は、北部ヨルダン溪谷で、ビニールハウスの撤去を通知した。
- ・スリフの入植者の攻撃で窒息者と木々が燃やされた。
- ・ラピド：警察官は、彼が脅威を感じた時に実弾を使うことは認められている。

7月19日

- ・占領当局は、ラマラの新たな入植地の前哨基地を合法化。
- ・204回目のアルキブの取り壊し
- ・占領当局は、ジェリコの家を取り壊した。
- ・モロッコで、イスラエル参謀長の訪問に反対するデモ
- ・西岸での逮捕キャンペーン
- ・イスラエルは、北部ガザを襲撃した。
- ・ヘブロン以南で、家と2件の家畜小屋を取り壊した。
- ・エルサレムのファタハの書記が西岸へ入ることを阻止する決定が更新・攻撃者は軽傷、入植者がエルサレムの刺殺攻撃で負傷した。
- ・占領は、エルサレムの活動家を一週間、アルアクサに入ることを禁止した。
- ・占領軍は、ビルナバラを襲撃し、車を押収した。
- ・エルサレムで入植者がモスクを急襲した。

7月20日

- ・デヘイシャで占領軍の銃弾で、青年が負傷。西岸で逮捕と襲撃
- ・イスラエル当局は、ジャルジュリアのビルを取り壊した。
- ・シュハットキャンプで、アルマクデシ・ユセフ・ムハイマールが逮捕・活動家たちは、ハルホルでの新たな前哨基地に反対するデモを行った。
- ・ヘブル音で、アハメド・マナスラとの連帯のためのイベントが組織された。

7月21日

- ・占領軍は、西岸での逮捕キャンペーンを開始した。
- ・ジェニンでの衝突と逮捕
- ・駐イスラエル米国大使：サウジとの正常化は時間の問題である。
- ・占領軍は、カフル・アッディックの農業部屋を取りこわし、テントを立てた。
- ・入植者が、マサフェール・ヤッタで羊飼いを攻撃した。
- ・米国：領事館の再開はイスラエルの手にある。

7月22日

- ・占領軍は、{ウエーブブレイカー} キャンペーンを継続し、新たな2大隊を明らかにした。
- ・ガザの諸党派、法の枠内の外で武器を使うものに、組織の保護を取り除く。
- ・入植者たちがテルルメイダの住民を攻撃しようとした。
- ・ガンツ：イスラエルはアブラハム合意以来、地域の諸国と10回の演習に参加した。
- ・タルクミヤ検問所でイスラエルの銃弾で労働者が負傷した。
- ・占領当局：16年前にイスラエル兵を殺害したパレスチナ人を逮捕
- ・占領軍は、ジェニンの3人の青年逮捕した。
- ・ロシアの法務省は、ユダヤ機関の解散を要求した。
- ・シリアの防空は、ダマスカス郊外の空への敵対的なミサイルに対峙した。
- ・カフル・カッダムの行進の弾圧で、6人が占領軍の銃弾で負傷し、数十人が窒息した。
- ・入植者たちは、ツルムサヤの土地で、30本のオリーブの木を伐採した。
- ・占領警察は、ナイフを所持した容疑で、青年を逮捕した。
- ・週例のデモ、入植者たちが、シェイクジャラでパレスチナの旗を燃やそうとした。
- ・人民戦線：ラヤンとアワダとの連帯で、日曜日75人の獄中者がハンストに入った。

オリーブの会通信 第23号(通巻29号)

7月23日

- ・ヤッファで青年が入植者たちから攻撃を受け負傷
- ・占領軍は、反入植地活動のあと、アルダハリヤの市長を逮捕した。
- ・シリワンで攻撃が夜明け前まで続き、負傷者と逮捕者がでた。
- ・カフル・カッドム、子供を含む5人の市民が占領軍の銃弾で負傷した。

7月24日

- ・ラファ海で、占領軍の船が漁船を追跡して破壊した。
- ・カバティヤで、占領軍のとの衝突で、二人が逮捕され、二人が負傷した。
- ・イスラム聖戦、ナブルスの二人の殉教者を追悼し、抵抗の枠組みを継続することを確認した。
- ・占領軍はナブルスの衝突でロケットを使ったことを認めた。
- ・ラビド：ロシアのユダヤ機関の閉鎖は両国関係に影響を与える。
- ・占領軍はカバティヤの町の青年を逮捕した。
- ・占領軍は、エルサレムの少女を逮捕した。
- ・ナブルスの南で作戦を行うとしたという容疑で、イスラエルの発砲でパレスチナ人が負傷した。
- ・占領軍は、3人のエルサレム市民を逮捕した。

7月25日

- ・ヘブロン南のダハリヤクロッシングで2人の労働者が標的にされ、負傷した。
- ・ジェニンの南で、占領軍は存在を強化し、いくつかの検問所を設置した。
- ・追放を条件に、二人のエルサレム市民の兄弟の釈放が決定された。
- ・人民戦線は、エルサレムでの占領選挙への参加の呼びかけに対して警告。

7月26日

- ・サルフィット：占領軍のブルドーザーは、アリエルの攻撃者の家を取り壊した。
- ・検問所と暴力、占領軍は、イサウイヤで、パレスチナと党派の旗を没収。
- ・ガザの南と中央で催涙ガスと銃弾を占領軍が発射。
- ・一か月の追跡の後、占領軍は、デヘイシャのライスを逮捕。
- ・占領軍は、イスラエルで作戦を行った2人の獄中者の家族の家を爆破。
- ・スレイマンのプールとアルキドル占領軍の襲撃で3人が負傷。
- ・占領軍は、ジェニンの西で、ルマナへの入り口に検問所を設置。
- ・イスラエル軍は、ジェニンの北で、商業施設のいくつかを取り壊した。
- ・占領軍は、6軒の居住している住宅の工事の停止の通知をした。

7月27日

- ・占領軍は、リッダでの家を取り壊し
- ・アルイサウイヤで房地を更地にし、破壊した。
- ・西岸で逮捕と襲撃
- ・占領軍はカルキリヤの東ハッジャ村で千本のオリーブの木を根こそぎに。
- ・占領軍は、ジェリコの東で、6軒の家と別荘を取り壊した。
- ・パレスチナは、国連の完全な加盟国になることを求めた。
- ・イスラエルは、アブマーゼンをテロを支持していると非難、。
- ・ハワラ検問所の近くで、占領軍に青年が銃撃された。
- ・ナブルスの南で、入植者たちの攻撃で、5人の市民が負傷した。
- ・プリンケン、ワシントンで、シャリン・アブアクレの家族と会った。
- ・浅慮軍はヘブロンで、市民を逮捕し、2台の車を没収した。
- ・占領軍は、ハリスの町での反入植地活動を弾圧した。
- ・西岸での襲撃と逮捕
- ・占領当局は、扇動の口実の下エルサレム6学校のライセンスをとりあげ
- ・ロシアのユダヤ機関の英差は、8月19日まで延期の決定。
- ・占領軍は、エルサレムの青年を逮捕
- ・シュタイエ首相は、ドイツにパレスチナ今夏を承認するように呼び掛け。
- ・ハワラ検問所でのイスラエルの銃撃で3人が負傷。
- ・イスラエルはナブルスの西で、新たに16ドノムを没収した。
- ・ガザからイスラエルに侵入しようとした二人の青年を訴追した。

7月29日

- ・占領軍は、バブ・アルアスバトで青年を逮捕
- ・アルムガハイールでの占領軍、入植者たちとの衝突で負傷者
- ・占領軍はヘブロンで2人の市民を逮捕した。

- ・占領軍は北部ガザで4人の漁師を逮捕した。
- ・占領軍は、ナブルスで3人の市民を逮捕。
- ・占領軍は、ミニエとドヘイシャで家々を急襲した。
- ・サウジ：クロススカイの決定は、パレスチナ問題での立場をかえない
- ・カフル・カッドムの行進の弾圧でイスラエルの銃弾で11人が負傷した。
- ・ナブルスの衝突で、イスラエルの発砲で、22人が負傷した。

7月30日

- ・エルサレム：ジャバル・ムカベルで銃撃で一人が殺された。

7月31日

- ・トルカラムの北で労働者が占領軍に撃たれ、逮捕された。
- ・ラマラの西のデル・アブミシャールを占領軍が襲撃した。
- ・占領軍は2人のエルサレム市民を逮捕した。

8月1日

- ・ナブルスで2人が負傷。占領軍は、逮捕と大捜査のキャンペーンを開始。
- ・占領軍は、ヒラル・アルクツクラブの本部を襲撃した。
- ・占領軍は、サルフィットの西で家を取り壊した。
- ・占領軍は、エルサレム知事を逮捕した。
- ・エレッツ検問所で、 Beit・ハヌーンの市民を占領軍が逮捕した。
- ・サルフィット：カフルアッディックの襲撃で。少年が負傷し市民が逮捕。
- ・占領軍は、アルイツァキャンプで2人の兄弟を逮捕した。
- ・米国とイスラエルの合同演習が行われた。
- ・エルサレム知事の逮捕が延長された。

8月2日

- ・抵抗諸派：ジェニンで起こったことは、占領と対峙する有効な選択肢は抵抗であることを証明した。
- ・イスラエルは、ケレム・シャロムとBeitハヌーンの境界を閉じた。
- ・アラブは、イスラエルを核非拡散条約に含むように要求。
- ・西岸での負傷者と逮捕者、占領当局は、ガザ国境の警戒レベルを上げた。
- ・占領裁判所は、エルサレム知事の裁判を延期した。
- ・占領当局は、シリワンのアブハドワンの家族の倉庫を取り壊した。
- ・占領軍と入植者たちはシリワンの家を襲撃し、建設作業を開始した。
- ・ヨルダン渓谷、入植地評議会は、農民の道具を奪うことで脅かしている。
- ・パレスチナは台湾問題で中国を支持した。

8月3日

- ・占領当局のブルドーザーがシリワンの家を取り壊した。
- ・スール・バヘル村で取り壊しとブルドーザをかけた。
- ・イスラエルは動員を続け、ケレム・シャロンとBeitハヌーンの境界を閉じ続けている。
- ・占領軍は、ベツレヘムの東で、井戸を取り壊し、オリーブの木を根こそぎにした。
- ・占領当局は、マサフェール・ヤッタの電力網の撤去と学校と家の取り壊しを通知した。
- ・占領検察は、エルサレムの知事に対する起訴を行った。
- ・エルサレム知事の逮捕を非難する連帯のスタンディングが行われた。
- ・カルキリヤの東で、クフル・カッドムの青年を逮捕した。

8月4日

- ・鉄道警備員がエルサレムの少年を攻撃。
- ・交通省は、ラモン空港の運営を否定し、カランディア空港の運営を要求
- ・36の学校が取り壊しの危機にある。
- ・ヘブロン南の家で2人の市民を逮捕。
- ・ヘブロンで一家の7人を占領軍が逮捕した。
- ・西岸で、夜の衝突と逮捕
- ・占領当局は、入植者たちにカフル・マリクの土地の計画にゴーサインをだした。
- ・エルサレム知事に、特定の期間なしに自宅軟禁にすることを決定。
- ・イスラエルは、1400の新たな入植地住宅を承認した。
- ・人民戦線：ガザの包囲の強化を非難し、それはイスラエルの安全をもたらさない。
- ・占領当局は、指導者バッサム・アルサーディの拘束を8日間延長した。

8月5日

- ・ジェニン：占領軍はブルキンで市民を逮捕し、ヤバドで少年を轢いた
- ・4日目でガザ国境が閉鎖、電気が最も影響を受けている。
- ・カフル・カッダムの行進の弾圧で、子供を含む9人が占領軍の銃弾で負傷した。
- ・占領軍は、エルサレムで、青年を逮捕した。
- ・米国とイスラエルは、紅海での演習を終えた。
- ・マサフェール・ヤッタの平和的な行進への入植者の攻撃で負傷者。
- ・占領軍は、非常事態への移行をアナウンスした。
- ・イスラエルは、10人のイスラム聖戦の活動家を標的にしたと発表。
- ・イスラム聖戦は、暗殺は、パレスチナ民衆への宣戦布告である。
- ・ハマス：敵はスカレーションを始めた対価を支払わなくてはならない。
- ・人民戦線、占領当局は、侵略の全面的な責任をおこなわなければならない。
- ・ガザへのイスラエルの砲撃の結果9人が殉教し、40人が負傷した。
- ・占領軍は入植者にシェルターにとどまり、レジスタンの反撃に備えるように求めた。
- ・NGOネットワークは、イスラエルのガザへの侵略を非難。

8月6日

- ・最初の反撃：周辺入植地へのロケット発射
- ・アルコッツ旅団テルアビブ、中央諸都市、100発以上のロケットで攻撃。
- ・ガザの東根のイスラエルの砲撃で、3人の子供を含む5人の市民が負傷。
- ・ヘブロン：占領軍は、市民が家に戻るのを阻止した。
- ・ベツレヘムの南のアルカでえーの町の衝突で、窒息者
- ・イスラム協力会議は、イスラエルのガザへの侵略を強く非難した。
- ・ヨルダンは、国際社会にエスカレーションを止めるため、緊急で効果的な行動をとるように呼び掛け。
- ・北部、中央ガザへの新たなイスラエルの砲撃で負傷者。
- ・イスラエルは、公式にガザ回廊への軍事作戦を継続することを決定した。
- ・イスラエルは家の爆撃を開始、殉教者の数が増加
- ・イスラム聖戦平穏はない、反撃は継続する。
- ・侵略の二日目、2人の殉教者と多くの負傷者が
- ・占領軍：我々は、少なくとも一週間をかけて作戦を継続する準備をしている。
- ・西岸での逮捕キャンペーン
- ・ガザ、殉教者と負傷者、抵抗運動は、入植地への爆撃を続けている。
- ・マンスールは、安全保障会議の議長と会談し、ガザの侵略を終わらせるように要求
- ・ジェニンの抵抗諸党派、西岸の入植地への道は、我々の銃弾の下にある。
- ・占領軍の戦闘機が、ハーンユニスの南を爆撃
- ・占領軍は、西岸とエルサレムで、大規模な逮捕キャンペーンを開始した。
- ・占領軍：我々はガザの3つのジハードの拠点を攻撃した。
- ・アシュケロンに直撃弾、テルアビブを含むイスラエルの諸都市を標的にした大規模なロケット攻撃
- ・ウム・アルハムで侵略を非難するデモ
- ・15人の殉教者数十人の負傷者。侵略の継続
- ・アブアリ旅団が、周辺入植地への爆撃の責任を発表
- ・クウェートは、国際社会にガザの侵略に対して団結を呼びかけ。
- ・イランの革命防衛隊の司令官：イスラエルは、ガザへの攻撃で重い対価を支払わなければならない。
- ・アルコッツ旅団、テルアビブと軍事拠点に複数のミサイルで攻撃した。
- ・エルサレムでガザのために叫んでいた青年が逮捕された。
- ・20人のイスラエル人が負傷し、病院に運ばれた。

8月7日

- ・ガザへの新たな攻撃と抵抗運動はロケットの発射を激化
- ・ジャバリアのイマム・アケルモスクの近くへの空爆で、殉教者と負傷者。
- ・テルアビブで、ガザへの侵略を非難するデモ
- ・保健省：イスラエルの侵略の開始以来、24人の殉教者、203人の負傷者。
- ・占領軍は、ヘブロンで3人の市民を逮捕し、テルルメイダの人々が家に帰るのを阻止した。

- ・ジェニン旅団は、ジェニン近くのイスラエル標的に銃撃したと発表。
- ・ジェニンの北東のジャラマ軍事検問所で占領軍との衝突
- ・イスラム聖戦の指導者アハマド・アルムダラルの子息が殉教した。
- ・シンベト侵略をやめることを提言、我々は、ハマスとジハードを分離するという戦略目標を達成した。
- ・占領軍は西岸で20人の市民を逮捕した。
- ・ベングビールと数百人の入植者がアルアクサを急襲している間、逮捕と攻撃が行われた。
- ・占領軍は、アルアクサでの夜明けの祈りで50歳以下を阻止した。
- ・イスラエルの攻撃と抵抗運動の爆撃で29人の殉教者と253人の負傷者。
- ・ベツレヘムの南での占領軍との対峙で、窒息者
- ・ジハードは、エジプトの仲介の停戦の申し出を拒否した。
- ・ヨルダン渓谷、占領当局は、プールと居住部屋の建設中止の通知をした。
- ・占領軍は、ガザの軍事作戦の終わりの日を設定することを拒否した。
- ・侵略の継続で、31人の殉教者
- ・ガザ回廊で、一時間で12人の殉教者、数十人の負傷者
- ・アルコッツ旅団は南部ガザの領空でイスラエル軍機を標的にしたと発表。
- ・ロイター：午後10時にエジプトが停戦を申し入れ
- ・ロケットがエスコルの家の近くに落下いくつかの入植地で停電。
- ・数万人が、ハレド・マンスールと彼の仲間を追悼した。
- ・2000人の入植者が、アルアクサを襲撃、逮捕と攻撃
- ・ラピド：ガザでの作戦継続に利点はない
- ・停戦合意は午後11時30分に始まる

8月8日

- ・侵略の結果、44人の殉教者、停戦は効力を開始
- ・ジェニンで、二人の獄中者の家を取り壊した。
- ・入植者のための道路を拡張するために、占領軍は、ワディサイルの土地を押収した。
- ・ガザの負傷者が死亡し、殉教者は45人となった。
- ・占領軍はラマラで2人のガザの青年を逮捕した。
- ・占領軍は西岸で16人の市民を逮捕した。
- ・イスラエルはガザとの境界を開いた
- ・占領当局は、ヤッタの東の2軒のブリキの部屋を取り壊した。
- ・殉教者は46人に。少女が負傷で亡くなった。
- ・占領軍は、タルクミヤで、12ドノムを更地にし、オリーブの木を破壊した。
- ・パレスチナ自治政府は、イスラエルの侵略について、安理会で演説

8月9日

- ・イサウィヤの村で、占領軍に二人の青年が逮捕された。
- ・40人が実弾で負傷。占領軍がナブルスの家を包囲している。
- ・アルハデールで、入植者たちが農地を攻撃し、150本のオリーブの木を根こそぎにした。
- ・ベツレヘムの南で、ハレット・ナハラの土地にキャラバンを設置。
- ・三人の殉教者、当局者、ナブルスでイブラヒム・アルナブルスの殉教を発表した。
- ・シュハット難民キャンプで、占領軍と衝突
- ・ヘブロンで、占領軍の銃弾で少年が殺された。
- ・占領軍は、ベツレヘム南東の家を取り壊した。
- ・シリワンで、占領軍との対峙で負傷者
- ・占領軍は、尋問のため、エルサレム市民を召喚した。
- ・ジェリコの南と北で、イスラエルの銃弾で、3人が負傷した。
- ・ヘブロンでの占領軍との衝突で、一人が殉教と5人が負傷。

8月10日

- ・ペイトウマールの衝突で銃弾での負傷者
- ・金曜日：パレスチナの怒りの日、占領軍の犯罪を非難。
- ・占領軍は、西岸で10人の市民を逮捕した。
- ・北部ヨルダン渓谷で取り壊しをはじめた。
- ・トルカラム：占領軍との対峙で、窒息者
- ・占領軍は、ベツレヘムの西、フサンで商店を取り壊した。
- ・アルイサウィヤとアルツールの町で衝突

オリーブの会通信 第23号(通巻29号)

- ・ガザの殉教者は、47人に
- ・ウム・アルファハム：イスラエル当局は、アイン・イブラヒム近隣の家を取り壊した。
- ・中央ヘブロンでの衝突で、占領軍の銃弾で、少年が負傷
- ・占領裁判所は、アイン・サミア・アルバダウィコミュニティの学校の取り壊しを決定した。
- ・オマンは、イスラエルの航空機が領空を飛ぶことを認めなかった。
- ・教育省：アイン・サミア学校の取り壊しの決定は、教育に対する占領犯罪である。

8月11日

- ・西岸での15人の逮捕と捜索
- ・ガザの侵略で負傷した子供が殉教。
- ・ジハードの指導者バッサム・アルサーディの拘束を延長
- ・占領軍、ラマラの二人の青年を釈放。
- ・占領軍はフサンの入り口に鉄の門をつけた。

パレスチナで愛されている歌

アクシ監獄から

<https://youtu.be/bAxdYcIR5Mo>

3人の男と3つの判決、告発：パレスチナへの愛、裁定：
処刑。

アタ・アル・ゼール、フッド・ヘジャジ、ジャムジューム、
3つの輝く星よ。

我が祖国の地を照らし、アッカからは3羽の鳩の葬儀が
行われた。

暗闇の中から現れ、我が国に光線を放った。

彼らは3人の男で、死に向かって競争し、目の前には抑
圧者の死の苦境があった。

そして彼らは、自分たちが守っている国の面積と同じく
らい大きな勇気と勇気をもって、それに立ち向かったの
です。

アッカの) 牢獄の間はあまりにも大きい、この勇士たち
にいつ終わるのだろうか。

その日は3日(火)、我が国(パレスチナ)よ。

答えよ... 誰があなたのために命と血を捧げるために駆
けつけるのだ?

アッカの刑務所から、モハマッド・ジャムジュンとフアー
ド・ヘジャジの葬儀が行われた。

我が民よ、彼らのために嘆き悲しめ。

この一年の悲しみがやってきた。

モハマッド・ジャムジュンはその意志で、フアド・ヘジャ
ジはその正義の愛で、彼らが提供したのを見てくださ
い!

- ・入植者がファタハの指導者を轢いた

8月12日

- ・占領海軍は、南部ガザ回廊で、漁師を田[^]ゲットにした。
- ・カタールは、ハマスと破壊された家の再建の要求に合意した。
- ・EUは、アイン・サミア学校のイスラエルによる取り壊しの結締を拒否し
た。
- ・最近の侵略で、負傷から殉教した。
- ・ナブルス南部での占領軍との衝突で、56人が窒息。
- ・獄中者mアワワダは、153日目のハンストを継続している。
- ・占領当局は、サルフィットの土地に、新たな入植地ブロックを設立する
計画

8月14日

- ・アイマン・オデーが民主戦線リストのヘッドに選ばれた。
- ・ベイトウマールの子供がイスラエル軍の銃撃で右目を失った。
- ・民主戦線：エルサレム作戦は、占領の犯罪への自然な対応である。
- ・ヘブロン県で、占領軍は4人の市民を逮捕した。

ただ、圧制者の裁きが彼らを処刑したのである。

ムハンマドよ、わたしはあなたがたの中で第一人者であ
る。

そしてヘジャージよ、言いなさい。ヘジャジよ、「わた
しは、あなたがたの中で最初の者です。

私の親愛なる母よ、世界のすべての国々が目撃する時が
来たのだ。

彼らはフアード、フアードよ、彼らは別れを告げるこ
とさえできないのです。

彼らはアッタに呼びかけた、アッタよ、あなたは男の栄
光であり、勇敢である。

彼は情熱をもって守備隊を攻撃した!

私の弟ユセフよ、そして私の母よ、私の妹に復讐しては
ならない、そうでなければ、あなたがたを破滅に追い込
むことになる。

この国のために、私は自分の血を犠牲にしたのだ。

この3人は獅子のように死にました。母よ、不動のまま
で、澆刺としたままでいてください。

この国(パレスチナ)のために、私たちは命も、体も、
魂も捧げるのです

そして、自由と勝利の王冠が私たちを待っているのだ!

火曜日のこの日、これらの若者は、勇敢なアッタとフアッ
ドの人々、絞首刑に処される。

おいしいパレスチナ シミタウク

- 2019年8月31日 (木)

- 準備時間

10分

- 調理時間

15-20分

- 盛り付け

3

シミ・タウクは、中東で人気のあるグリルチキンのレシピです。ヨーグルト、にんにく、オリーブオイル、スパイスでマリネした柔らかくてジューシーな鶏肉の塊に、にんにくのアイオリ (Toum) を添えた一品です。

シミ・タウク (タウク、タウークとも表記される) は、中東諸国で広く親しまれている鶏肉料理です。シミもタウクもトルコ語を語源とする言葉である。シミは“串”、タウクは“鶏肉”を意味する。シミ・タウクは国によってさまざまなバージョンがあるが、基本は同じで、角切りにした鶏肉をスパイス入りのヨーグルトに漬け込み、串に刺して焼いたもので、完成度は高い。

マリネ液

シミ・タウクのおいしさの秘密は、マリネ液にある。マリネ液の主な材料はヨーグルトと搾りたてのレモン汁の2つです。これらは風味をよくするだけでなく、マリネすることで鶏肉をやわらかくする効果があります。私は全乳のプレーンヨーグルトを使うのが一般的ですが、このレシピはとてもフレキシブルです。低脂肪のプレーンヨーグルトやギリシャのプレーンヨーグルトで代用しても、全体の味はほとんど変わりません。

私はレバノンに行った時や、近所の中東系食料品店で Tawook というスパイスミックスをよく買います。このミックスは美味しく、私にとってはずっと楽なものです。しかし、私はスパイスミックスに含まれている個々のスパイスのリストと量を含めています。タウクのスパイスミックスは非常に汎用性の高いものであることを心に留めておいてください。人によっては、私が下に書いたような生姜やニンニクのすりおろし、あるいはパプリカを加えないかもしれません。また、ナツメグと一緒にクローブを挽くレシピも見つかります。ですから、ご自分の好みに合わせて自由に編集してください。スパイスとトマトペーストのおかげで、鶏肉の色がオレンジ色になります。

シミ・タウクを焼く

鶏肉はできるだけ長く、最低でも1時間はマリネしてから焼くようにしましょう。ミラクル解凍トレイを使うと、冷凍食品の解凍時間を半分に短縮できるので、愛用しています。私は夏に屋外でタウナギを焼くのが好きですが、一年中、屋内のグリルパンで焼くこともあります。鶏肉を刺す前に木製の串を水に浸しておくと、串が焦げにくくなります。串を刺さずにスキレットでソテーしたり、オーブ



ンで焼いたこともあります。どちらの方法も、結果はあまり印象的ではありませんでした。

。レバノンでは、チキンタウクには必ずトゥームというソースが添えられます。私は、チキンタウクを、グリルした玉ねぎやトマト、ファトウーシュやタブーリと一緒に食べるのが大好きです。このレシピをぜひ楽しんでください。

ステップ1

鶏胸肉は2インチ角の大きさに切ります。ボウルに入れておきます。

ステップ2

にんにくをつぶし、ボウルに入れる。

ステップ3

ヨーグルト、オリーブオイル、絞りたてのレモン汁、トマトペースト、塩、タウクスパイスを加える。

鶏肉全体にマリネ液が行き渡るまでしっかり混ぜる。

最低でも1時間、できれば4時間、冷蔵庫でマリネしておく。

ステップ4

漬け込みが終わったら、鶏肉を串に刺す。

予熱した中火のグリルで10～15分、途中でひっくり返しながらかく。

トゥームとピタパンを添えていただく。

シミ・タウク (タウク)

シミ・タウクは、中東で人気のある焼き鳥のレシピです。ヨーグル



11月2日京都府部落解放センターで、元テレビキャスターの金平さんの講演会を行いました、100名近くの参加者があり、盛況のうちに終わりました。



10月18日オーストリア政府は、西エルサレムへ大使館を移転することを撤回。2国家解決を支持した。



10月16日占領軍によって、虐殺されたアサドさんの家族は、事件を放棄する見返りとしてのいかなる賠償の受け取りを拒否した。

今号の内容

パレスチナの抵抗は拡大している・・・1
 英雄的【シュファット検問所】作戦・・・2
 オスロ合意から29年・・・3
 10月戦争49周年に寄せて・・・5
 エルサレムにおける教育の「家族化」に立ち向かうために・・・7
 アルジェリア宣言・・・10
 パレスチナ日誌・・・11
 パレスチナの愛した歌・・・14
 おいしいパレスチナー・・・15
 トピック・・・16



10月18日マレーシアで、パレスチナ人を誘拐したモサドのエージェントが逮捕され、パレスチナ人は解放された。モサドのエージェントは欧州でリクルートされ、パレスチナ人を誘拐し、モサドが尋問を行った。



10月13日アルジェリアでパレスチナの統一のための宣言にパレスチナ諸党派は署名した。今回の合意も、これまでのように実行されない可能性が高い。オスロ合意路線の実際的な否定がなければ、対立が続いていきます。パレスチナの民族的統一は彼岸ですが、パレスチナを解放する路線的な違いは克服しがたいものがあり、